授与機関名　順天堂大学

学位記番号　甲第 1734 号

The effect of preoperative urinary tract infection on postoperative renal function in prenatally diagnosed ureteropelvic junction obstruction; Indications for the timing of pyeloplasty

(先天性腎盂尿管移行部閉塞症例における尿路感染症による腎機能推移の検討; 腎盂形成術の至適時期)

須田　一人（すだ　かづと）

博士（医学）

論文審査結果の要旨

本論文は、出生前診断の腎盂尿管移行部閉塞症に対して、腎盂形成術前の尿路感染症(UTI)発症頻度が腎機能に影響するか比較し、またその頻度が腎盂形成術前適応の指針となり得るかを検討したものである。

過去 15 年間における出生前診断の腎盂尿管移行部閉塞症 81 例のうち腎盂形成術前を施行した 34 例(37 腎:含む両側施行 3 例)を対象とし、術前の尿路感染発症回数により U(-)群（尿路感染：1 回以下)、U(+) 群（尿路感染：2 回以上）:について後方視的に比較した。その結果、DTAP（GFR）は腎盂形成術前では両群間に差がなかったが、腎盂形成術後では U(-)群は U(+)群に比し有意差をもって高く、また U(-)群は術前と比し改善していた。DMAS（uptake）は、術前では両群間に差がなかったが、術後では U(-)群は U(+)群に比し有意差をもって高く、また U(-)群は術前と比し改善していた。

本論文では、出生前診断の腎盂尿管移行部閉塞症における腎盂形成術前の 2 回以上の UTI 発症は術後の腎機能改善を妨げる因子である可能性があるために、尿路感染を 1 回発症した症例に対しては早期に腎盂形成術を施行する必要性を初めて提言するなど、臨床的に意義のある結果を示された。

よって、本論文は博士（医学）の学位を授与するに値するものと判定した。